

< 海外情勢 >

現実味を帯びる「東アジア核戦争」の恐怖

北朝鮮の中距離ミサイル「ムスダン」の発射実験成功を受け、米国は深刻な憂慮を表明する一方で速やかな軍事的対応を公表。半島情勢が一気に危険度を増した。だがその裏側で「危険な駆け引き」が展開されている――。

5回連続で失敗したミサイル「ムスダン」

さる6月22日午前、北朝鮮は2回続けてムスダンの発射実験を行い、最初は失敗したものの次にはミサイル発射に成功している。ムスダンの発射実験は4月に開始してから失敗続きで、何と6度目の挑戦でやっと成功したのだ。5度も失敗して6度目に成功。成功率16.7%。これで成功なのだろうか。韓国の「未だ成功したとは言い難い」というコメントが、じつに要領を得ている。そう考える方が多いかもしれない。だがこの発射実験の連続失敗、最後の成功の裏には衝撃的事実が隠されている。核戦争の恐怖が目前に広がっているのだ。これは決してオーバーな表現や脅しではない。

あまり解説されることのない北朝鮮の「ムスダン」発射実験について検討しようと思うが、まずは北朝鮮のミサイルについて概略を見ておこう。

北朝鮮は短距離ミサイル（射程300～700km）としてスカッドB、スカッドCというミサイルを持っている（北朝鮮では「火星5号」「火星6号」と呼ぶ）。これらは旧ソ連のスカッド・ミサイルに手を加えたもので、韓国を攻撃目標とするミサイルである。

ノドン（火星7号）というミサイルもある。スカッドをさらに改良したミサイルで1993年5月に発射実験に成功しており、射程は1200～2000km。韓国南部や日本を攻撃目標に置くミサイルである。

さらにテポドン1号、2号がある。テポドン1号は射程2000～2500km。日本全土が射程に入る。テポドン2号は射程13000kmで、米国本土を狙えるICBM（大陸間弾道ミサイル）である。

ノドンとテポドンの中間に位置するのがムスダンであり、射程は3200～4000km。北朝鮮は「米軍グアム基地を標的にするミサイル」と公言している。ムスダンは2003年に開発され、2005年には18基～20基がイランに輸出されてい

る。2006年にイランで発射実験に成功したとの情報もある。ムスダンが実用化されれば、北朝鮮は短距離からICBMまで全種類のミサイルを保有していると胸を張れる。北朝鮮がムスダンの発射実験を行うことにはそうした意味があり、今年早々からムスダン発射実験を行うとの観測もなされていた。

今年の3月に米韓合同軍事訓練が行われた。「キーリゾルブ」「フォールイーグル」と名付けられたこの軍事演習は「核ミサイルの発射権限を持つ者の首を叩き斬る『斬首作戦』」という意味を持つ。明確に言えば、米韓は「金正恩の首を叩き斬る」という計画の軍事訓練を行ったのだ。これに北朝鮮が反応するのは当然のことだ。

米韓合同軍事演習終了直後の4月15日、故・金日成主席の生誕日でもあるこの日、北朝鮮で初となるムスダンの発射実験が行われた。だが発射と同時にムスダンは爆発したか墜落したか、とにかく失敗したのだ。常識的に考えて、このような失敗があれば、原因解明のため最低半年、場合によっては1年くらい次の実験は行われない。ところが北朝鮮は2週間近く後の4月28日午前1度、午後にもう1度のムスダン発射実験を行っている。2回とも水平方向に打ち出し、直後に墜落もしくは爆発して大失敗に終わっている。水平方向に打ち出すこと自体、遠くまで飛ばそうという意思が感じられず、意図的にミサイルを破壊したのではないかとの憶測も一部で流れていた矢先の5月31日に、4度目となるムスダン発射実験が行われ、発射直後にまたも爆発を起こして失敗に終わっている。

4回連続の失敗。誰かが責任を取らされて死刑になるのではないか、そんな噂が流れる6月22日午前、またまたムスダンが打ち上げられ、このときは150km上空まで舞い上がって爆発した。多少は空を飛んだが、これも失敗である。この失敗に世界中がとりあえず安心した直後に、この日2回目となるムスダンの発射が行われたのだ。

驚愕的高度技術を駆使して発射されたミサイル

この日2回目となる発射実験は、ついに成功した。それもただの成功ではない。途轍もなく難しいやり方で成功している。難しいとは、発射角度のことである。

打ち上げの発射角度は83度だった。83度という打ち上げ角度は異常である。物体を遠方に飛ばすためには、真空中だと45度の角度が最適だ。空気抵抗がある場合、追い風、向かい風、横風など状況によって変化するが、およそ30度から35度の角度が望ましい。83度といえば垂直に近く、距離は稼げない。

この角度で打ち上げたため、発射されたムスダンは最大頂点高度が1413.6kmにまで達している。中距離弾道弾としては、あり得ない高度だ。大気圏をはるかに越えた外気圏の外まで飛び出している。これが地上に戻るためには外気圏・熱圏・中間圏（電離層）・成層圏（オゾン層）・対流圏と呼ばれる界層に再突入しな

ければならず、そのたびに方向が歪む可能性があるのだが、今回のムスダンはそれをものともせず、打ち上げられた方向の直線上 400km の日本海に着弾しているのだ。専門家の誰もが舌を巻く、想像を絶する高度な打ち上げ技術が導入されていることは確かだ。

この成功に金正恩は「日本に対してまったく迷惑をかけていない」と前置きしたうえで「正確にグアムに核弾頭を打ち込むことが可能」と大見得を切っている。北朝鮮はこの実験成功がよほど嬉しかったのだろう、ムスダン発射成功に高笑いをする金正恩など 36 枚の写真を公開している。韓国はこの実験に対し、「成功したとは言い難い」と解説し、日本でもそうした受け取り方が強いが、米国は「極悪無道な (flagrant) 違反行為」(ホワイトハウス・アーネスト報道官) と真剣な懸念を表明し、「本気で対応する」と北朝鮮に対し制裁以上の行動に出ることを言明したのだ。

核兵器による北朝鮮の壊滅計画

制裁を越えた「本気の対応」とは何か。「北朝鮮壊滅作戦」、あるいは「核兵器の脅威除去作戦」と呼ばれる米軍の作戦計画実行である。この計画は米国の民間シンクタンク『ストラトフォー』が作成し公表したものだ。

『ストラトフォー』とは正式名称をストラテジック・フォーカスティング有限公司 (Strategic Forecasting, Inc) といい、軍事情報通にはお馴染みの名である。20 年前に創設された民間会社だが、情報通の間では「CIA の子会社」と囁かれている。軍産共同体の傘下と解説する者もいる。正体は明確ではないが、CIA を初め NSA (国家安全保障局) や国防総省などと深く関わっているようだ。『ストラトフォー』はコソボ空爆 (1999 年) 時の正確な直前情報開示で知られ、9 1 1 同時テロ (2001 年) の報道が正確かつ迅速だったことで名を高めた。2003 年 1 月にはイラクを攻撃するための作戦として「イラクの自由作戦」を公表したが、3 月 19 日から始まった米英軍によるイラク制圧戦はこの『ストラトフォー』が公表した作戦計画通りに行われたのだ。

その『ストラトフォー』が今年 5 月末に北朝鮮攻撃計画として「核兵器の脅威除去作戦」を公表している。この作戦の立案責任者は CIA 主席分析官のジョージ・フリードマンであり、イラク戦争のことを考えると、この作戦計画に則って米軍が北朝鮮攻撃を開始する可能性が高いと考えられる。

ではその「核兵器の脅威除去作戦」とはどのようなものなのか。

公表された作戦計画書は全 5 章からなり、最後の 5 章に具体的な軍事戦略が記されている。それによると――。

B 2 ステルス爆撃機 10 機と F 22 ステルス戦闘機 24 機を投入し、各機が 90kg GBU (バンカーバスター弾) を 16 発ずつ搭載。計 544 発で北朝鮮各地に点在する目標を破壊する。同時に北朝鮮の東西、渤海と日本海に沈んでいたオハイオ級原潜 5 隻～10 隻が北朝鮮主要部に核ミサイル攻撃を行い、同海域に展開して

いるイーグリス艦数隻から計 600 発のトマホーク巡航ミサイル（核弾頭型と通常型）で目標を攻撃。予備攻撃用にグアムから B 52 爆撃機とミシガン級原潜が同空海域で待機する――。

イラク戦争とはまったく異なる。イラク戦争では、イラクが核兵器や生化学兵器を所有しているとの情報も流されたが、米英軍は初めからイラクにそんな兵器があるとは考えていなかったのではないだろうか。ところが北朝鮮の場合には、明々白々に核兵器を所有し、核攻撃が可能なミサイルを持っている。瞬時に、完璧にぶっ潰さない限り、米軍基地や韓国、日本が核攻撃される可能性がある。

そして『ストラトフォー』作成の「核兵器の脅威除去作戦」が実行に移された場合、北朝鮮が反撃する可能性は、どれくらいあるだろうか。『ストラトフォー』はこう答える――北朝鮮の反撃の可能性は完璧にゼロである。ただし北朝鮮の攻撃能力は日々進化を遂げている。反撃の可能性ゼロを維持するためには、可及的速やかにこの作戦を実行に移す必要がある。

北朝鮮のムスダン発射実験に隠された暗号

状況を冷静に見る限り『ストラトフォー』が作成した北朝鮮の「核兵器の脅威除去作戦」が実行に移される日が近いように感じられる。しかし一方で、オバマ大統領がテレビ番組で語った「米国は北朝鮮の現政権を確実に倒す兵器を所有しているが、米国の最優先課題は北朝鮮周辺の同盟国を守ることだ」との発言、さらに「米国は北朝鮮を攻撃しない」というメッセージ（本紙 5 月 6 日既報）があり、この情報は間違いなく正確なものである。

この状況は北朝鮮第一次核危機の時と酷似している。

1993 年に北朝鮮が I A E A（国際原子力機関）脱退を口にして「準戦時体制」を採り、ノドン・ミサイルを発射して、その一発が日本列島を越えて太平洋に着弾。翌 1994 年 6 月にジミー・カーター元大統領が北朝鮮を訪れ、核戦争の危機が回避されたことがあった。

じつは 1993 年末には米国は北朝鮮攻撃を行う直前にあったのだが、このとき米国は北朝鮮・寧辺の原子炉を爆撃により完全破壊する予定だった。ところが寧辺の位置が韓国に近く、放射能が韓国国土を覆う危険性が指摘され、米軍の軍事行動に待ったがかけられた。

今回、米軍が北朝鮮を攻撃する場合には「完全で徹底的」なものとなる。近年の核弾頭・核爆撃が飛躍的に進歩し、超小型核は目標を正確に捉え、放射能は劇的に少なくなっているとされるが、それでも数百発あるいは千発超の核が北朝鮮に炸裂すれば、朝鮮半島全域どころか日本列島にもその影響が出る可能性が高い。

オバマ大統領の発言通り、米国は北朝鮮を確実に倒せるが、周辺の同盟国の被害も甚大となる可能性が高いのだ。

そしてもう一つ、米朝関係には見逃してはならない兆候がある。

すでに本紙が「朝鮮半島に異常あり！」（5月6日）で詳述した通り、米国が水面下で北朝鮮と接触を続けていることは紛れのない事実である。朝鮮戦争休戦協定を平和協定にするための秘密協議と考えられるが、別な議題が話し合われている可能性もある。そして、米朝の秘密会談は昨年末以降かなり頻繁に継続されている。それはNSC（国家安全保障会議）と密接な関係を持つビクター・チャの発言からも推測できる。

4月以降に行われた北朝鮮のムスダン発射実験の失敗続きと、6月22日2回目の衝撃的高度技術のお披露目。ここには米朝間だけに理解できる「暗号」が潜んでいたのではないか。水面下の米朝交渉の議題に対する北朝鮮側の回答がムスダン発射失敗だったと考えて間違いないだろう。そして話し合いの決着がついたところで、北朝鮮は実力を誇示するように高度技術による異常角度打ち上げ実験を米国に見せつけた。金正恩の勝ち誇った笑顔の秘密は、そこにある。では、米朝はいったいどんな秘密協議を行っていたのか。

ムスダン発射実験でサード・ミサイル韓国配備が確定！

世の中で意味不明の出来事や辻褄の合わない事件が起きた場合、「この事件で誰が得をしたのか」を分析すると、事件の真相に迫れる場合がある。ただしこれは絶対ではないから、多少の注意が必要だろう。

では、今年4月以降、度重なる北朝鮮の「ミサイル発射、失敗」で、得をした者はいるだろうか。

北朝鮮国内のミサイル開発部署やミサイル部品製造会社などと答えたら、まず物笑いにされる。当たり前だが、これは正解ではない。正解ではないが、注意すべき点がある。というのは、ご存知の通りミサイルにも核兵器にも「賞味期限」がある。ミサイルの場合には燃料が固体燃料か液体燃料かで異なる。ムスダンが固体燃料なのか液体なのかは、わかっていない。固体燃料であれば相当な期間、ときには数十年は大丈夫。液体燃料の場合には、燃料を注入してから数日以内とされるが、最新の技術では数年間は使用可能だともいう。仮に数年は大丈夫だとしても、それでも使用期限はある。北朝鮮が賞味期限切れに近づいていたムスダンを意図的に打ち上げ失敗→爆発させた可能性は十分あり得る。

賞味期限切れのミサイルを破壊するために発射実験をした可能性はあるが、これを除いて北朝鮮の「ミサイル発射、失敗」で得をした者は誰か。答えは米国、正確にいえば米国の軍産複合体あるいはその代理人ともいえる国防総省である。6月22日のムスダン発射成功を受けて米国防総省は「サード・ミサイルの韓国配備を大至急行う必要がある」と述べている。

サード・ミサイルとは「終末高高度防衛ミサイル Terminal High Altitude Area Defense missile」のことで、敵ミサイルを迎撃、撃破するために開発され

たミサイルと迎撃システムである。発射された敵ミサイルを撃ち落とすのが目的だが、何より重要なのは敵ミサイルの発射を察知するためのXバンドレーダーと呼ばれる超高性能探知レーダー装置である。米国の国防総省は以前から韓国にXバンドレーダー装置を含んだサード・ミサイル・システムを導入しようと画策してきた。「ならず者国家・北朝鮮のミサイルを監視するため」である。

米軍のサード・ミサイル・システム韓国導入には中国は猛反対を続けてきた。中国の共産党機関紙『人民日報』の国際版『環球時報』は「韓国がサードを配備すれば、人民解放軍は東北地域に強力な軍事配備で対応する」としたうえで「もしそうなれば、韓国の国土は、中国と米国が軍事配備を敷いて『碁を打つ』敏感な地域になる」と、韓国を舞台に米中戦争が勃発すると警告している。

なぜこれほど中国はサード・ミサイル・システムの韓国配備を拒否するのか。それはXバンドレーダーが韓国に敷設されると、中国の動向が米国に完全にバレてしまうからなのだ。Xバンドレーダー設置で、中国のほとんどの地域が、米国のレーダーにより丸見えになってしまうのだ。

今年1月の北朝鮮核実験、2月のICBMミサイル実験で朴槿恵大統領はサード・ミサイルの韓国導入をほぼ受け入れる状況になっていた。今回のムスダン発射実験は、いわばダメ押しのようなものだが、これによりサード・ミサイル・システムの韓国導入は決定的となった。米国防総省が北朝鮮をけしかけて、ムスダン発射実験を何度も行わせ、サードの韓国導入を決定させたと考えると、すべての辻褄が合う。ムスダンの度重なる失敗は、暴走する国家・北朝鮮を印象付けるための手段だった可能性は否定できない。

米中を操り漁夫の利を得る北朝鮮

ムスダンの発射実験は米国製サード・ミサイル・システムの韓国配備を決定づけるための演出で、軍産複合体と北朝鮮が裏で繋がっているとする説は、本紙だけの専売特許ではない。ネット情報を検索していないので明言はできないが、状況を冷静に分析すれば、この答えは導き出せる。だが北朝鮮の行動は、この程度の安っぽさ、生易しきで理解できるものではない。現在進行中の驚愕のプログラムを正確に把握する必要がある。

まずは北朝鮮という国の本質を理解するところから始めたい。

北朝鮮という国は、最初はソ連が作った傀儡国家だった。それがソ連と袂を分かち、中国を巻き込んで米国との朝鮮戦争を戦い抜き、その後は米ソ中という強大3大国に挟まれながら、したたかに生き抜いた国である。かつてブッシュ大統領が「ならず者国家」と呼んだが、その表現は当たらずとも遠からず。とくに初代の金日成の時代には、抗日パルチザンとして戦ったゲリラたちが、国家運営など考えずにヤクザ同様に生命を賭けて世界と渡り合って築き上げた国家だった。

2代目の金正日の時代も、幹部たちの多くは金日成時代のパルチザン、わかりやすくいえばヤクザ者同様の戦士たちだった。胆力だけが売りで、今日一日をど

うやって切り抜けるかが重大事だった。ところが3代目の金正恩になったところで潮目が大きく変化した。

今年6月末に「6カ国協議」の変形版である「北東アジア協力対話」が北京で催された。

「6カ国協議」とは「朝鮮半島の非核化のための会議」である。ところが現在では、北朝鮮の非核化など不可能なことは誰もが理解している。「北東アジア協力対話」に出席した北朝鮮の外交部米州局・崔善姫（チェソンヒ）副局長は、「6カ国協議は北朝鮮の非核化を協議する会談だったが、今はその使命を変えなければならない」と根本的問題を突きつけ、応対する日米中韓5カ国を慌てさせている（6月23日）。完全に北朝鮮のペース、北朝鮮がリードする会議に変わっている。いま北東アジア情勢を握りコントロールできる者は北朝鮮だけなのだ。

それを象徴するのが北朝鮮の序列第8位の李洙墉（リスヨン）朝鮮労働党副委員長の訪中と、習近平国家主席との対等な対話だった（6月1日）。

国際外交の常識から考えて、小国の序列8位が大国のトップと対等な形で会うことはない。例外的に、たとえば今年6月にケリー米務長官とルー米財務長官の2人が揃って北京で習近平と会談したことがあるが、これは超大国米国だからできる話なのだ。仮に日本のNO.8や韓国のNO.8が訪中して習近平に面会を求めたらどうなるか。その人物が次期首相とか次期大統領であれば別だが、それ以外では面会すら不可能である。では、なぜ北朝鮮NO.8の李洙墉は習主席と対等に会うことができたのか。美味しい餌——中国にとって重要な情報——を所持していたからだろう。

ちなみに李洙墉は北朝鮮の外相格だが、元は駐スイス大使で金融の天才と噂される人物。話題になった「パナマ文書」で、米国の上場企業24社が北朝鮮と金（ゴールド）の取引を行っていたことが暴露されたが、北朝鮮側がタックスヘイブンに作ったペーパーカンパニーのオーナーは李洙墉だという。さらに余談になるが、北朝鮮の金産出量は膨大量を誇る。その金鉱は日本統治時代に作られたもので、大戦中でも年間5～6トンほどの金を掘り出していた。その金鉱の脇にウラン鉱が見つかったのは最近のことだが、もし日本が戦前戦中にこれを見つけていれば、歴史は変わったかもしれない。

話を本筋に戻そう。現在東アジアでは中国と米国が厳しく対立している。「中国VS米国」という構図が、南シナ海では米中直接対峙の形をとり、朝鮮半島では米中が韓国の奪い合いで対立する。大陸と台湾との関係にも、また日本と中国の関係にも、微妙に米国が関係して、東アジア全域で「中国VS米国」という構図が危険な雰囲気を高めている。その「米中対峙」をますます強めているのが北朝鮮なのだ。奥深く、じっくりと情勢を俯瞰していただきたい。北朝鮮は米中の本格激突を煽っていると考えられるのだ。朝鮮戦争は韓国対北朝鮮の戦争だった

が、最終的には米国と中国が激突した。いま北朝鮮が望んでいるのは、東アジアを舞台に米中が全面戦争を開始することなのだ。

東アジアをこんな危険な状況に導いてしまった原因の一つは、かつて東アジアの盟主としてアジアに号令を発していた日本の弱体化であることを理解する日本人はどれくらいいるだろうか。